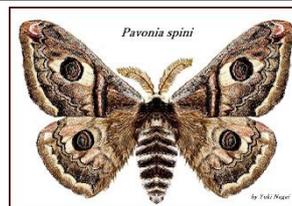


Citrina 通信

キトリナつうしん
No. 887



昆虫館 G オープン記念特別展「ヘルマンヘッセ展」 Grand Opening Commemorative Special Exhibition "Hermann Hesse Exhibition"

新部 公亮



タイトル脇のクジャクヤママユ:これは、永井佑樹という当時 12 歳の少年に頼んで描いてもらった色鉛筆画です。この図は年齢入りでドイツでも展示され、観た人に感動を与えました。また、岡田朝雄先生が新たに翻訳し直した『少年の日の思い出』(草思社)の表紙にも採用された傑作です／写真 1:入口を振り返ると巨大なヘッセの顔が 2 枚／写真 2:カルフ市から戴いたヘッセの寓話本『ピクトールの変身』を掲示／写真 3:珠玉の小編『少年の日の思い出』を 10 景に分け、輸入標本で具現化。

人文的昆虫展として取り組んだのは、2009 年、中学時代に国語の授業で学習したヘッセの『少年の日の思い出』だった。展示用標本箱の制作期間約 3 カ月。格調高く飾られた標本箱に、岡田朝雄氏は右手の親指と人差し指で「丸」印を笑顔とともに示してくれた。

「日光だいや川公園」で初公開されたヘッセ昆虫展会場にて、栃木県石橋町（現在の下野市）のドイツ人国際交流員を呼び、岡田氏と彼女に面と向かってこう依頼した。「先生、私をモンタニョーラ（ヘッセが半生を過ごしたスイス南部の保養地）に連れて行ってください」

通常 3 年は掛かる海外へのイベント輸出が、たったの 10 カ月で実現した。ドイツの公立機関であるシュツットガルト自然史博物館及びヘッセ生誕の地・カルフの市役所の協力の賜物であった。ドイツでの開催が 2010 年春に決まり、私と監修の岡田氏がカルフ市役所から招待されるに至った。最初、「日光だいや川公園」への出前から始まった小さな昆虫展が、遂に海を渡ったのである。

海外での評価も大変高く、昆虫展を核にした文化交流は日独交流 150 周年事業の一環として、日本及びドイツでも承認され、専用ロゴマークを冠することが出来た。

ほどなくして、「シュヴァルトツヴァルト・黒い森」の入口に位置する南ドイツ・ヘッセン州カルフ市観光協会長から、岡田氏と私に、「企画展『ヘッセと蝶』に是非お出てください」との正式な招待状が届いた。

ヘッセ昆虫展開催による成果

1. 新訳『少年の日の思い出』（岡田朝雄 訳、草思社刊）の発刊及び舞台の朗読劇へと派生した

2. 欧州にてヘッセ昆虫展が 5 回（ドイツ 4 回、スイス 1 回）開催された
3. スイス会場では在スイス日本国大使夫妻とヘッセの孫 ジルバー・ヘッセ氏、カルフ会場では在ミュンヘン日本国総領事官、栃木県マロニエ昆虫館には生物学者・福岡伸一氏、広島県福山文学館には漫画家・池田理代子氏がそれぞれ来展した。鳩山邦夫氏から激励の葉書が届く
4. ドイツ・ガイエンホーフエンと栃木県下野市での本展は、互いに「日独交流 150 周年記念事業」となり、同様にスイス・モンタニョーラ会場でも「日瑞西交流 150 周年記念事業」の公認展覧会となった
5. 日本国内から『少年の日の思い出』が掲載されたドイツの地方新聞が発掘された
6. 大阪の愛蝶家・木下總一郎氏が保管しておられたパルテベニヒカゲが、ヘッセ本人の採集品であることが証明された（NHK・ニュースウォッチ9で放映）
7. 全世界へ向け発売されるヘッセ水彩画カレンダーに、早川邦夫氏が所有する作品が採用された（2013 年 4 月分。ドイツ・スイス以外からは初めて）
8. ヘッセ肉筆の水彩画 2 枚を、世界で初めて栃木県下野市でのヘッセ昆虫展にて公開
9. 教材として『少年の日の思い出』に登場する銅版画図鑑のチョウ・ガ 4 種を画像データにして、レプリカ標本付き展翅板とともに全国 251 の中学校に寄贈した
10. 福山市の文化財団からヘッセ昆虫展の記念誌（資料集）が発行された

（にいべ・こうすけ／2025 年 12 月 00 日）



写真 4: 岡田朝雄訳『蝶』をヘッセ筆の水彩画と標本で具現化／写真 5: 元々は中学国語の教材として制作した展示用標本箱／写真 6: ヘッセ少年が観ていた蝶類図鑑を展示、追体験もできる／写真 7: 『クジャクヤママユ(1911)』と『少年の日の思い出(1931)』の比較／写真 8: NHK を視聴した蝶の愛好家からヘッセ採集の標本について手紙が届く／写真 9: 全国 251 の中学校へ配った『少年の日の思い出』の教材キット
 (写真: 寺 章夫)

「世界のアゲハチョウ図説」展 “Papilionidae of The World” Exhibition

グランドオープン展示のもう一つの目玉は中江信氏の「世界のアゲハチョウ図説」展だ。この昆虫館の企画立案者で館長の中江氏が不調で参画できないために、寺が代わって展示計画を立てたが、やはり中江氏のライフワークである「世界のアゲハチョウ」テーマにするのがこの館に一番ふさわしいと考え、彼が著した「世界のアゲハチョウ図説」を紹介することをメインテーマにした。

■まずは、「学名について」「同定とは」「ラベルの重要性」について、一般の人にもわかるように平易に説明した。当初は小学生にも読めるようにルビを振ったところ、

手間がかかる上に行ピッチが不ぞろいになったり、美しくないのでは止めることにした。

■次に、トリバネアゲハの名前の由来となったショットガンで撃ち落されたヴィクトリアトリバネアゲハの標本写真を添えた解説や、南北アメリカ大陸のキアゲハの仲間についてのパネルを用意した。

■三番目に、「世界のアゲハチョウ図説」が出来るまでと題して、図説の誕生までの秘話を中江氏と出版社の昆虫文献六本脚の川井社長からのヒヤリングを元に写真を添えてパネルにした。(写真右下)テーブルの最後に六本脚提供の実物の図説を閲覧用に置いた。



■図説の見開きをコピーを実際の本を開いたように立体的に加工して、その上に中江氏所蔵の実物標本をそれぞれの写真の上に刺した。あたかも図鑑から本物の標本が飛び出しているような作りをして、「立体図説」と称した。アキリデス類の翅の構造色は退色することなく光り輝いているので、印刷された図版との対比が面白い(写真上右)。またトリバネアゲハ類は、縮小した図版と実物大の標本の比較はわかり易い(写真下左)。

■アゲハチョウがびっしりと詰め込まれた標本箱を、ずら

りと並べるのはどこの昆虫館でもやっている事で、その時は感動しても、おそらく見終わって「世界にはいろいろなアゲハチョウがいるもんだ・・」で終わってしまうと思う。

■今回の展示は来館した人たちが、何か一つでも心に残るものをお土産に持って帰ってもらおうと言う気持ちから、少し違った切り口の展示にしてみた。これからも、観に来て良かったと思えるような、チョウや虫たちの奥深い世界を紹介して行きたいと思っている。

(寺章夫/2025年12月17日)

奥久慈 食べ録 ⑥



ユズシャーベット

ユーパル矢祭

■初めて矢祭に訪れた時に矢祭町唯一のホテル「ユーパル矢祭」に泊り、館内の宴会場で虫の里関係者の顔合わせ懇親会があった。その酒宴のデザートに「ユズシャーベット」が出て、ユズ好きのテラ爺はいっぺんに気に入ってしまった(写真上)。程よい甘さとユズの風味にシャーベットの食感が相まってとても美味しい。

■その後、矢祭出張のたびに、お土産に買って帰る。車ではアイスボックスでも3~4時間の輸送はNGで、クロネコの冷凍便で送ってもらうようにしている。宅急便代はばかにならないが、それを差し引いても美味しいので、いつも6個入りを注文して帰る。

■それが、9月に買おうとしたら、今年の分のゆず釜の製造は終わって、カップ販売のみとのこと。聞くと町の製菓店でなくユーパル矢祭で自家製造しているそうで、ホテルの製造直売だと知った。矢祭町のふるさと納税の返礼品としても出ているので、矢祭町の特産品だ。

■ゆず釜(写真上)とカップ(写真下)の2種類があり、それぞれ1個360円と330円。ゆず釜はくり抜いたユズが丸ごと器になっていて、食べた後は刻んでうどんやお吸い物に使える。我家では冬のシーズンまでの1年分が冷凍庫に入っている。

■館内の温泉に入り、ホテル受付け脇のアイスケースからこのカップをひとつ買って、ロビーのソファで食べるのは至福の時間だ。



こんにやく餅・陣野

埴町埴栄町37

■矢祭村は明治時代から蒟蒻(こんにやく)芋の生産地として名高く、蒟蒻を乾燥して粉にする技術が開発されたことで、保存性が向上し遠隔地への輸送ができるようになり、矢祭の財政に貢献したと聞く。佐川正一郎矢祭町長が経営する古くからの蒟蒻製粉工場「佐川商店」は町の基幹産業だ。(写真左)

■その矢祭名産のこんにやくを使った「こんにやく餅(やまぶぐ餅)」が埴町の和菓子店「陣野(じんの)」で作られている。串団子や乾菓子などもあるが、お店の看板には「こんにやく餅本舗」とあるので、看板商品のようだ。道の駅「はなわ」でも山積して売っていた(写真下右)。

■赤ちゃんの耳たぶのように柔らかくて、白くて薄甘いお餅に甘く炊いた小豆が1粒入っている。素朴で何とも言えず美味しい。羽二重餅のようで、こんにやくの餅と言われなければ、わからないほど上品だ。



(寺章夫)

タイトル画像: クジャクヤママユ・*Saturnia spini*
永井佑樹君(当時12歳)の色鉛筆画